

## 第40回神奈川県病院学会 一般演題優秀演題

演題 No	病院・所属団体名(所属)	氏名	職種	演題名
4	藤沢市民病院 (看護部 救急ICU)	佐々木 彩	看護師	新型コロナウイルス感染症患者家族に対する終末期医療 —終末期となった患者と家族への支援のあり方—
21	平塚市民病院 (臨床検査科 細菌検査室)	間地 知子	臨床検査技師	「それ、本当に陽性ですか？」 新型コロナウイルス感染症偽陽性見極め方の症例報告
24	横須賀共済病院 (中央検査科)	難波真砂美	臨床検査技師	新型コロナウイルス感染症に対する 当院検査科の取り組み
27	金沢文庫病院 (リハビリテーション 技術科)	鈴木 奈菜	言語 聴覚士	急性期病院から地域へ発信 ～ 「食」を支える支援を目指して～
29	平塚市民病院 (経営企画課)	加藤 亮介	事務	病病連携でクラスターを防ぐ仕組み の構築 ～4病院間PCR連携～

第40回神奈川県病院学会【2021年7月12日(月)】

テーマ：「With/Afterコロナ時代の地域医療」

特別講演・シンポジウム

・・・ 実地＋生配信 及び録画配信 (7月20日～8月16日)

一般演題 32演題 (コロナ関連 19演題 /他 13演題)

・・・ オンデマンド配信 (7月12日～8月16日)

## 新型コロナウイルス感染症患者家族に対する終末期看護 —終末期となった患者と家族への支援のあり方—

病院名 藤沢市民病院  
職種・所属 看護師 救急 ICU  
発表者氏名 佐々木 彩  
協力者氏名 福田隆 宇田川信幸

### 【はじめに】

当院は湘南東部医療圏唯一の第2種感染症指定医療機関であり、数多くの新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）患者の受け入れを行っている。今回、COVID-19で呼吸状態が悪化したため体外式膜型人工肺（ECMO）を導入したが、脳出血、多臓器不全により終末期となった患者と家族の看護を経験した。COVID-19により終末期となった患者と家族への支援のあり方について、症例を振り返り報告する。

### 【倫理的配慮】

看護部倫理委員会の承認を得た。また、発表については家族からの同意を得た。

### 【事例紹介】

70代、男性、現病歴：発熱あり PCR陽性判定、COVID-19の診断で入院となる。家族構成：妻と二人暮らし。

### 【看護の実際】

患者は、妻が面会可能となった時には病状が進行し、すでに終末期の状態であった。感染隔離のため深刻な病状であっても、妻は直接面会することはできなかったが、患者の姿は病室の窓から確認できたため、窓越しでの面会を実施した。看護師は、妻の希望に添って夫婦だけが知っている呼び名を妻に代わって患者に伝えた。患者はその後、お亡くなりになり、納体袋にご遺体を納めることとなった。その前に、妻から顔が見える位置にベッドを近づけて最期の対面を行い、窓越しで患者の手と妻の手を合わせた。最期の時まで妻の思いは、看護師を通して患者に伝えられ、看護師も妻と共に患者の死と向き合った。

### 【考察】

COVID-19患者の受け入れ当初は、情報が少ないなかで、医療者の安全も確保しつつ模索しながら終末期にある患者と家族を支援した。妻に的確な情報を伝えて最善の治療が行われていることを共有し、感染隔離のために直接寄添うことができない精神的苦痛など全人的苦痛を理解して妻を支え、面会環境を整えたことは全人的苦痛の緩和となったと考える。また、妻に寄り添い感情の表出を受け止め、思いを傾聴して共感することで信頼関係の構築につながった。さらに、信頼関係性を保つことでニーズを把握し、患者へ家族の思いを伝えることができた。

### 【結論】

1. 感染隔離により患者や家族は強い心理的反応に影響することを考え対応する。
2. 終末期看護の概念を多角的側面で整理し、患者家族のニーズを把握する。
3. 看護師の直接ケアや、チーム医療が効果的に機能しているか確認しながら、終末期医療を提供できる組織体制を整備していくことが大切である。

「それ、本当に陽性ですか？」  
新型コロナウイルス擬陽性を見極め方の症例報告

病院名 平塚市民病院

職種・所属 臨床検査技師・臨床検査科 看護師・感染対策室

医師・消化器内科 医師・内科

発表者氏名 間地知子

協力者氏名 石井美千代 中山里佳子 武内悠里子・片山順平

【はじめに】

PCR 検査での擬陽性は、陽性患者として対応されると患者は意図せず感染の危険に曝される。以下、当院で擬陽性と判断した症例と擬陽性を見極めについての報告をする。

【症例 1】院内検査での PCR 擬陽性例。

症例は 90 歳女性、施設入所中に転倒し当院救急搬送となり、大腿骨転子部骨折をみとめ入院となる。来院時 37.8 度と発熱をみとめ、抗原検査を施行し陰性であった。翌日のスクリーニング PCR 検査で陽性をみとめたが、呼吸器症状、胸部 CT 検査で肺炎像もみとめず、擬陽性の可能性が高いと考え PCR 検査を隔日にて 2 回実施した。

2 回とも陰性を確認し、スクリーニング PCR 検査は擬陽性と判断した。なお、Ct 値は N1(ヌルカ<sup>o</sup>シ<sup>o</sup>) 遺伝子 35.8、N2(ヌルカ<sup>o</sup>シ<sup>o</sup>) 遺伝子 37.4 と高値であった。

【症例 2】転院先 PCR 検査擬陽性例。

症例は 92 歳女性、施設入所中に発熱をみとめ当院を受診した。胸部 CT 上誤嚥性肺炎の所見をみとめ入院となる。入院時 PCR 検査は陰性であった。症状軽快したため転院したところ、転院先の入院時に行ったスクリーニング PCR 検査で陽性となり、当院へ再入院となる。転院先に Ct 値を問い合わせたところ、Ct 値 N1 遺伝子 36.2、N2 遺伝子 36.9 と高値であり、擬陽性を強く疑い、当院で PCR 検査を隔日にて 2 回実施した。2 回とも陰性であり擬陽性と判断した。

【症例 3】転院先 PCR 検査擬陽性例。

症例は 52 才男性、意識障害、呼吸不全のため当院救急搬送となった。胸部 CT 上肺炎像をみとめ、肺炎の診断で入院加療となる。入院時 PCR 検査は陰性であった。病状が安定したため転院したところ、転院先の入院時スクリーニング PCR 検査で陽性と判明。しかし、転院前日に当院で行った PCR 検査は陰性であり、擬陽性を疑った。

転院先での Ct 値は E(エンペ<sup>o</sup>フ) 遺伝子 37、N(ヌルカ<sup>o</sup>シ<sup>o</sup>) 遺伝子陰性であり、E 遺伝子のみが検出されており、Ct 値も高値のため擬陽性の可能性が高いと考えられた。しかし、感染初期の可能性も否定できないため、転院先で PCR 検査を隔日にて 2 回実施したところ、2 回とも陰性であり擬陽性と判断した。なお、この症例は当院から転院後、PCR 検査陽性であったためコロナ専用病床へ一度転院になっている。

【考察】当院検査室では、Ct 値が高い(35 以上)、増幅曲線がなだらかな傾きである、N1 遺伝子と N2 遺伝子の結果が乖離している場合、非特異的反応やコンタミによる擬陽性の可能性が高いため、PCR 検査の判定に注意が必要であり再検査を行っている。

## 新型コロナウイルス感染症に対する当院検査科の取り組み

法人名 国家公務員共済組合連合会  
病院名 横須賀共済病院  
職種・所属 臨床検査技師・中央検査室  
発表者氏名 難波真砂美  
協力者氏名 小塩智康 高橋のぞみ 津浦幸夫

## 【はじめに】

新型コロナウイルス感染症が蔓延してから 1 年以上が経とうとしているが、未だに収束が見通せない状況が続いている。その中で当院検査科が臨床検査技師として何が出来るかを模索しながら、取り組んできたことについて報告する。

## 【方法】

1) 臨床検査技師の検体採取の実施、2) 新型コロナウイルス検査の実施、3) 患者さんとスタッフがより安心安全にできる検査と環境整備の 3 点について対策をとってきた。

## 【結果】

- 1) 臨床からの要望もあり臨床検査技師による検体採取実施に向け準備を開始した。当院検査科スタッフの約 9 割が検体採取等に関する厚生労働省指定講習会を経て資格を取得していたが、未取得者についても日本臨床検査技師会により開催された web 講習会を受講し検体採取の資格を習得し、検査科内で PPE 脱着を含む検体採取トレーニング実習を実施した。2020 年 4 月からは医師・看護師とともに横須賀 PCR センターへ参加し臨床検査技師が検体採取を実施し、現在も当院敷地内にある横須賀第 2 PCR センターで継続している。また院内においては全入院前検査の検体採取に向け準備し、週 5 日検体採取を実施している。
- 2) 検査のできる人材と既存機器から、新型コロナウイルス感染症検査を当院でどのように実施していくかを検討中の 3 月に、まず PCR 検査を外注に委託するための準備を始め、院内では 6 月に抗原定性検査を開始し。遺伝子検査は当院感染制御部医師とも相談し、LAMP 法を 7 月から導入することになったが、更なる人材教育のために神奈川県臨床検査技師会が実施している「PCR 検査の体制強化のための研修」受講した。また 8 月には全自動遺伝子解析装置 FilmArray を導入し 24 時間 365 日体制で PCR 検査に対応している。
- 3) 各検査については学会推奨をもとに医師と相談のうえ検査実施内容を決め、病院の理解と当院感染制御部の指導を受け、環境整備として飛沫防止カーテンの設置やフェイスシールドの着用、生理検査室では要所要所の消毒やベッド周りの使い捨てカバーの使用など、患者さんとスタッフができるだけ安心安全に検査ができるよう取り組んだ。

## 【まとめ】

コロナ禍で活動することで今まで以上に様々な職種スタッフと連携をとることができ、そのことで理解も深まり臨床検査技師をより知って頂き機会にもなった。また検体採取業務に係わることで医師・看護師の負担軽減にも貢献できたのではないかと思う。今後は検査の精度や迅速性を担保しながら、日常業務に追加する形となった検査や検体採取業務によるスタッフの負担を、いかに軽減していくかということが課題と考えている。

法人名 医療法人社団愛友会  
病院名 金沢文庫病院  
職種・所属 言語聴覚士・リハビリテーション技術科  
発表者氏名 鈴木奈菜  
協力者氏名 惣台奈奈 鈴木麻友 山森直子 成田恵  
中平愛 佐々木統弥 橋本和樹 正躰早苗

### 【目的】

当院は横浜市金沢区内でも施設が密集している地域にあり、地域密着型のホームドクターとしての役割を担っている。入院する患者の約4割が呼吸器疾患で、中でも誤嚥性肺炎を併発した摂食嚥下障害患者へのアプローチは必須である。しかし、治療後に退院してもすぐに誤嚥により再入院する方が散見されており、当院の摂食嚥下治療の質向上と退院後の誤嚥性肺炎予防に向けた取り組みを行ったため報告する。

### 【方法】

#### 1) 院内連携

摂食機能療法の強化を目的に看護師と言語聴覚士を中心に摂食チームを立ち上げ、書類の簡素化や訓練表の作成、食事ラウンドを開始した。さらに摂食嚥下勉強会を実施した。

#### 2) 院外連携

誤嚥性肺炎での再入院予防への取り組みとして近隣施設(当院と連携のある特養等)職員向け勉強会・交流会を行った。”

### 【結果】

経口摂取者(楽しみとしての摂取も含む)の割合が取り組み前後で約4割から7割へ増加した。摂食チーム立ち上げ後の勉強会参加看護師数は2倍以上増加し、摂食嚥下に対する意欲の向上とスキルアップが図れた。看護師がチームの窓口となることで病棟への発信が円滑になり、業務効率の向上につながった。院外向け勉強会・交流会では、10施設より20名の参加があり、アンケート結果では高い評価を得ることができた。また退院患者について電話相談や退院時直接指導など、新たな連携ルートも構築された。

### 【考察】

看護師と言語聴覚士の密な情報共有や看護師の意識向上とスキルアップ、書類整備による円滑な摂食機能療法の介入により患者の経口摂取者数の増加につながり、患者の「食べる喜び」を実現できた。これらの活動により摂食嚥下の分野でも地域のホームドクターとしての役割を果たすことのできたのではないかと考えられる。さらに金沢区をはじめ近隣施設職員との勉強会や交流にて地域のレベルアップを図る活動は、タスクシェア・タスクシェアにつながり、今後も継続して行っていきたい。

法人名 平塚市民病院

病院名 平塚市民病院

職種・所属 事務・経営企画課

発表者氏名 加藤亮介

協力者氏名 山田健一郎 相澤史幸 佐藤和栄

### 【目的】

令和2年度の上半期は、新型コロナウイルス感染症の院内クラスター発生が各所から報告された。新型コロナウイルス感染症の院内感染が発生すると救急や通常診療の受入制限などにより、近隣の病院の負担が生じ、地域医療崩壊の恐れがある。病院内で新型コロナウイルス感染症が発生した場合には、早期に検査結果を得て、感染範囲を特定し、対応することで診療機能の低下を最小限にとどめることができるため、効率的な検査体制の構築が必要と考えた。

### 【方法】

病院単独の検査能力には限界があることや外部業者への委託では検査結果を得るまでに時間を要することから、なるべく早期に数多くの検査結果を得るため当院の病院長から他院の病院長に働きかけて PCR 検査の実施について、地域で連携することとした。

### 【結果】

平塚、中郡にある平塚共済病院、東海大学大磯病院、済生会湘南平塚病院、当院の4病院間で、新型コロナウイルス感染症の院内感染が発生した場合に備え、互いに PCR 検査を行う協定を締結した。その結果、自院で実施可能な検査数の約2倍程度を即日実施できるようになった。

### 【考察】

現時点では、この協定に基づき相互に PCR 検査を実施した実績はないが、地域医療を守るために地域の病院間で有効な連携をすることができたと考えている。